ウランバートル編

モンゴル通信

2013年7月20日

NO.1

モンゴルからこんにちは

皆さん、お元気ですか？敬和学園はもう夏休みですね。部活動や海外教室、卒業後の進路に向けて準備を重ねたり、家族との時間を持ったりするなど、それぞれ大切な時を過ごすことでしょう。

私は、7月1日にモンゴルに来て、はや三週間。7月いっぱいは、首都のウランバートルで同期派遣の16人で共同生活を送りながら、語学学校に通ったり、モンゴルについて学んだり、銀行口座開設や住居探しをしたりと、任地チョイバルサンへ行く準備をしています。

草原を訪ねて

休日を利用して、遊牧民の方と遊牧生活をされている山本千夏さんという日本人女性を訪ねてきました。ウランバートルからバスで二時間も行けば、まあるい青空と雲の影が美しく映る草原！360度遮るものが見当たらない素晴らしい景色は「夢のよう！」でした。

馬や羊、山羊、牛の放牧と、体験型のツアービジネスをしている山本さん。自由自在にモンゴル語を操りながら、年に4回の移動生活や真冬の放牧の難しさなど、色々な話しを聴かせて下さいました。山本さんのゲル（移動式住居）の中で絞り立ての牛乳をいただいていると、足下に昼寝中の子羊が…。「お昼寝常習犯の子羊は、放牧に出すと寝てしまい、置いて行かれて迷子になるから、ここで寝かせておく。」とのこと。

ボルドック草原

白い雌馬

その後、馬に乗らせてもらいながら、3時間近く草原を行くことができました。乗馬初心者を乗せてとぼとぼ歩くことは、馬にとって大変なストレスがかかるため、先導していた馬乗りのおじさんが「馬に風を見せに行く」と駆けて行く姿が印象的でした。また、馬は故郷を忘れない性質があるそうで、「ホームシックにかかると夜中に逃げてしまうから、年に一度は故郷を見せに連れて行く。」とも話していました。

一頭、一匹の性格や特徴を捉え、人間がそれに合わせて暮らしていました。厳しい環境ではあるけれど、生き生きしているなぁと感じました。任地チョイバルサンも草原近くの街なので、遊牧民の暮らしや価値観を学べることへの期待が高まりました。

首都ウランバートルでの暮らし

日本の約４倍の土地に、日本の約５０分の１の人々が暮らすモンゴル。広々とした草原でゆったりと暮らす姿を想像していましたが、首都ウランバートルは正反対の世界。モンゴルの総人口約２８０万人中、半数もの人がウランバートルに暮らしているのです。

私自身も、蛇口全開時のチョロチョロ水やお湯の出ないシャワーと停電も当たり前の暮らしをする中で、この街が、抱えきれない人の生活をなんとか支えようとしていることを痛感しています。

街が車やバス、人で溢れ、ゴミや大気汚染の課題が山積しようとも、地方では放牧以外の仕事を見つけることが困難なため、首都ウランバートルに移住する人は増え続けています。高層ビルや高級マンションの建設ラッシュの中、どのように人々の生活と雇用が整えられて行くのか、日本や国際社会がどのような支援を行っていくのかにも注目していきたいと思います。　（冨井愛）

大切な羊。
余すことなく
頂きます。

スフバートル広場、国会議事堂